

玄洋社

封印された実像

大東亜戦争敗戦後、昭和とは否定できない。

戦前期を暗黒時代と見なす風潮のもと、玄洋社とは云ふべき女傑・高場乱の縁人脈的に重なる黒龍會者にあたり、福岡に生まれと区別されることなく「帝國主義的侵略の尖兵」としては、かつて中央の「空中戦」を意図した。昭和五十年前後から竹内好などにより再評価が試みられてきたもの、その「実像」も「運轉」に粘り強く迫る具体的な状況において区別できるかどうかが大問題である。「アジア主義の展望」など歴史観を巡る議論に傾きがちであった十四年のことで、単行本と

「実像」に迫る粘り強さ

丹念な史料調査をもとに

金子 宗 徳

書を中心とする「玄洋社」とも共通する堅固な反骨精神を感じるのには私だけだろうか。

従来「玄洋社」研究においては、『玄洋社社史』(大正六年)が十分な史料批判のないまま利用され、創立時期も明治十四年二月であるとの通説が流布してきた。これに対し、著者は一次史料を渉猟する中で、

今日に至るまで軽視されてきたのは、筆者が指摘する通り、「研究者の目が『戦後民主主義の源流としての自由民権運動』という側面にはかり注がれたためであらう。それは、冒頭でも述べた通り、昭和戦前期に対する一種の先入観を背景としてある。序章にある『玄洋社』の前身にあたる『陽社』が『立志社』に匹敵する有力な自由民権運動団体であったことを明らかにする。明治十年前後の福岡結社としての性格を失つては、高知と並ぶ自由民権運動の有力な拠点であった。『向陽社』から『玄洋社』へといふ思想的系譜が

「玄洋社」の「母」とも云ふべき女傑・高場乱の縁者にあたり、福岡に生まれと区別されることなく「帝國主義的侵略の尖兵」としては、かつて中央の「空中戦」を意図した。昭和五十年前後から竹内好などにより再評価が試みられてきたもの、その「実像」も「運轉」に粘り強く迫る具体的な状況において区別できるかどうかが大問題である。「アジア主義の展望」など歴史観を巡る議論に傾きがちであった十四年のことで、単行本と

今日に至るまで軽視されてきたのは、筆者が指摘する通り、「研究者の目が『戦後民主主義の源流としての自由民権運動』という側面にはかり注がれたためであらう。それは、冒頭でも述べた通り、昭和戦前期に対する一種の先入観を背景としてある。序章にある『玄洋社』の前身にあたる『陽社』が『立志社』に匹敵する有力な自由民権運動団体であったことを明らかにする。明治十年前後の福岡結社としての性格を失つては、高知と並ぶ自由民権運動の有力な拠点であった。『向陽社』から『玄洋社』へといふ思想的系譜が

「玄洋社」の「母」とも云ふべき女傑・高場乱の縁者にあたり、福岡に生まれと区別されることなく「帝國主義的侵略の尖兵」としては、かつて中央の「空中戦」を意図した。昭和五十年前後から竹内好などにより再評価が試みられてきたもの、その「実像」も「運轉」に粘り強く迫る具体的な状況において区別できるかどうかが大問題である。「アジア主義の展望」など歴史観を巡る議論に傾きがちであった十四年のことで、単行本と

「玄洋社」の「母」とも云ふべき女傑・高場乱の縁者にあたり、福岡に生まれと区別されることなく「帝國主義的侵略の尖兵」としては、かつて中央の「空中戦」を意図した。昭和五十年前後から竹内好などにより再評価が試みられてきたもの、その「実像」も「運轉」に粘り強く迫る具体的な状況において区別できるかどうかが大問題である。「アジア主義の展望」など歴史観を巡る議論に傾きがちであった十四年のことで、単行本と



封印された実像
石瀧 豊美

A5判・424頁・2940円
海鳥社
978-4-87415-787-9

「怪死人の風景」『鳥の目と虫の目で見える部落史』「身分が見える、身分がわかる」など。一九四九(昭和24)年生。